

---

# 東方零崎録

燐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方零崎録

### 【Nコード】

N1640U

### 【作者名】

燐

### 【あらすじ】

東方神々録の修正版

色々設定が違いますがちょっとずつ更新していきたいなうと思っ  
ています

誤字脱字がありましたら報告してくれると凄く嬉しいです。では  
は

## プロローグ(前書き)

燐

「復活！かな？とりあえず頑張って行きたいと思います！」

## プロローグ

「……はい？」

十六の世界を喰らいその身は負に染まったり人としての概念を超越した存在“罪遺物”と呼ばれる人物、零崎<sup>れいさき</sup> 紅夜<sup>こうや</sup>は言い渡された言葉に耳を疑った

「だ・か・ら、新しい平行世界<sup>パラレルワールド</sup>が出来たんだよね。数千万年くらいに」

腰まで延びている金色の髪を揺らしながら凄まじい速さで書類に目を通してしている紅夜にとって唯一無二の親友で破壊神の夜天<sup>やてん</sup> 空は左目だけを紅夜に向け口を開いた

「いや〜、最初はどうでも良かったんだけどその世界の人間の進化的な意味で行ってきてくれない？」

「進化のスピード……それはどれくらいなんだ？」

「今のところは超科学な大都市が出来てきて多分月に移住とかも出来るんじゃないかな？」

「……戦争とかは？」

人は欲を持つものそれは色々あり時にそれは他の命をも奪い合って

しまうこともある。  
それが俺は嫌いだ

「ないね。奇跡的にけれど……」

「けれど？」

「ん〜ん〜。あつちの世界には妖しい怪物、よくに言う“妖怪”  
が住んでいてそれと人間がぶつかることが多いかな」

「妖怪……」

それは一体どんな存在なのだろうか

「紅夜の体にも入っているよ〜。正確には魂がだけどね」

「……ああ、知っている」

十六の世界を食らった紅夜はその世界の力を使え森羅万象ですら覆  
す程の力を持っている  
その中にも妖怪かそれに近い生物を喰らっているためその力を扱え  
る。

だが、紅夜はまだ妖の存在を見たことがあまり無いわけで今一妖の  
力つまりは妖力を使いこなせてない

「でっ、どう行ってくれる？」

「それは命令か？お願いか？」

過去に色々あって空と俺は主従関係を結んでいて勿論全てに対して

主である空優先だ

「僕はあまり主従関係は好きじゃないのこと知っているよね？」

「……はあ、分かったよ」

穢れなき笑みをする空、こいつは身内に対しては上下関係を嫌う俺はゆっくりと立ち上がり書類の山に沈んでいる空を見た

「はい、座標。これがあれば紅夜でも自力で行き来できるでしょ？」

渡されたのは複雑な数式が書いている一枚の紙で俺はその数式を頭に記憶して転移の準備をする

「期間は50から100年くらいもし寂しくなったらいつでも帰ってきていいよ」

「よし。転移術式構築完了……と」

「コラァー！。人の話聞いたか！？」

「はいはい、寂しくなったらな」

「むっ……あつ、そっだこれも渡しておくね」

「ん？。これは？」

渡されたのは複雑な術式が刻まれた短剣、戦闘でも使えそっだがあまり期待が出来そうにない短剣だった

「これは『空間を開閉する程度の能力』が宿った短剣で無限のポケットになるんだ。因みに名前は『爪操』」

「へえ、便利そうだなありがとう」

内心程度じゃないような気がするが

空操を受け取りコートの内側のポケットに入れる

「それじゃ、行ってきます」

「いつてらっしゃい〜土産よろしく」

はいはいと呟きながら転移術式に魔力を流し込み紫色に光る術式と共に紅夜は姿を消した

## プロローグ（後書き）

燐

「便利アイテムゲット！」

紅夜

「でもこれド〇えもんの……」

燐

「細かい話は気にすんな！」

紅夜

「はぁ……まっいいか」

燐

「次回は地に舞い降りて適当に妖怪と戦闘させよう！」

紅夜

「俺は平和主義なんだが」

燐

「争いこそが平和への最善の道だ！」

紅夜

「……それ結構問題発言だと思うけど」

燐

「気にすんな。次回もお楽しみにしてくれると嬉しいな、ではでは」



紅夜  
「あゝ、……よろしく」

妖怪と呼ばれるもの(前書き)

燐

「更新〜こんな感じで頑張っしていきたいなと思っています」

## 妖怪と呼ばれるもの

豊かな自然

小鳥の囀ずりが所々から聞こえる

その森を見通すことが出来る絶壁の崖に突如光が満ちる

晴れると黒いコートに全身を隠した零崎 紅夜の姿が出現した

「ここが……」

頭のフードを退け一面の緑の大地を見渡す

「……………あっ！」

暫く黄昏ているとふと思いついた

「俺この世界の地理知らない……………！」

空から“お願い”されてこの世界を見に来たが紅夜はこの世界を知らない

それは今自分が何処にいるかも分からない

詰まり今の紅夜に置かれている状況は“迷子”

「……………はあ」

一度帰って地図か何でも空に教えてもらおうと思ったが却下した

帰るのが面倒さいのもあるがこの歳で迷子になりました地図を貸して  
てくださいなんて言えるわけない

「この世界の住人でも探すか……」

そう呟くと紅夜は絶壁の崖から“落ちた”

高さは二百メートルは越えているがなんも躊躇いもなく紅夜はただ  
重力に従い落ちていく

因みに紅夜は正気である。

紅夜は人間ではない人間の概念を棄てた“罪遺物”と呼ばれる“物”  
である

フワリと万物の重力が曲げられ紅夜の落下スピードはまるで紙が落ち  
ているほどゆっくりとなり普通の人間ならば死んでいる高さは無  
傷で足を地に付けた

「……行くか」

彼の能力は『無限を行使する程度の能力』かつて十六の世界を喰らい

人間、天使、悪魔、神、龍等限りない種族の魂を紅夜はその身に宿  
している

その為紅夜は妖力、魔力、神力、霊力等様々な力が使えその喰らっ  
た力は万象を曲げ操り壊し正に無限の力となるのだ

「やっぱり、帰るべきだったかな……」

数時間紅夜はさまよい続けたが見るのはいつも同じ風景

空は茜色に染まりあともう少しすれば漆黒の空が全てを覆い尽くす  
だろう

「……………」

ふと足を止めた

今まで感じた気配とは全く違う何かを感じたからは  
その何かは自分が持つ妖力とよく似ていた

「（空が言っていた妖怪か……？）」

すると木の間から三メートルはある頭に二本の角を生やした人間ではない者が現れた

「ほう…同類かと思えば人間か」

「……誰だ？」

「名乗る前にお主が名乗ってはどうか？」

「……零崎 紅夜」

「ふむ、我の名は忌羅<sup>オウラ</sup>ともうす」

「そうか、ところでこの近くに人間が住んでいる所を知らないか？」

「腹が減っているのか？今行けば返り討ちに合うぞ」

妖怪は人間を喰らう……食物連鎖か？

「遠くから来たんだこっちのことを知らないんだ。良ければこっちのことを教えてくれないか？」

「ふむ、よからう」

「助かるそうだな……」

その後、たっぷりこの辺りの地理やら人里について聞かせてもらった

驚く天として人里には光学兵器……ビーム等やミサイルもあり迂闊

に人里に近づけないとか

更に人里を鉄壁の守りにした指導者は八意 永琳という賢者の存在

……

空が食いつきそうな人物だなあいつたまにそんな人間を見つけては  
拉致する時があるからな…… 所謂天才同士の会話して見たいとかな  
んとか、凡人の俺には一生理解できそうにないがな

「助かった。ありがとう、忌羅さん」

「ふっ、中々礼儀がいいのこの辺りの妖怪はかなり荒い奴らだらけ  
だ気を付ける」

「分かった頭の片隅にでも記憶しておくよ」

「……ふむ、紅夜と言ったか」

「ああ、それが名前だ」

「私と戦ってみぬか？」

「俺は」

言い終わる前に巨大な拳が迫る

咄嗟に両手で防御するがかなりのパワーに腕が痺れた

「やはり防ぐか」

「っ……何のつもりだ」

「なに……お主のその深いさ興味が沸いたのだ、付き合ってはくれないかの？」

付き合ってはくれないかの……っでもう手が動いているだろうが……けど聞いた話ではこいつは妖怪の中でかなりの実力者であることが分かる……どうする？

「考え事をしてる場合かの？」

「!?!」

突然忌羅の腕のパワーが増幅されもう一度降り下ろされた鉄拳を避ける

拳は地面に叩き込められ巨大なクレーターを生成された

「ほう、避けるか」

地面に入り込んだ拳を抜くと構える忌羅

冗談じゃないあんなもの直撃したらぺちゃんこになるぞ……ちっ

「我が能力『増加する程度の能力』……お主は捌き続けるかの？」

その言葉と共に速さを増加させ正に一つの弾丸となった忌羅を横に  
躲す



「ほう、速いの」

「そっちな」

俺は平和主義何だけどな……まああつちには戦いたがっているし殺るか

ちあ

どつ、  
勝どつか

妖怪と呼ばれるもの（後書き）

燐

「チートだなおい」

紅夜

「まあ、確かに強力だなただ俺自身あまり使いたくないしまだ制御が完璧じゃない」

燐

「確かにね。分かる分かる」

紅夜

「でだ……次回は決着、そして人里……だ」

燐

「まあ、そんな感じに仕上げたいなあ……とな思ってないます。では！」

## 決着そして勝利（前書き）

燐

「IS更新したのでこっちも更新します！  
こんな感じで少しずつやって行けたらな」

決着そして勝利

ドン、バキッ、ドガン！

大地を揺らす剛音があちらこちら響く

そしてそこから黒い影が逃げるように動く

「……………つまらぬ」

だが、その言葉と共に剛音は静まり土煙が辺りを覆う

「お主……………なぜ反撃してこない」

「……………」

土煙が晴れると全身黒いコートを身に纏った紅夜の姿が映った

「私の攻撃を全て捌く程の実力……………何故じゃ？」

まるで息をするように剛腕から繰り出される連撃を紅夜は全て紙一重で躲す

忌羅の能力『増加する程度の能力』は妖力や身体能力を無制限に上げることが出来る強力な能力それを使ってさえも全て躲す紅夜、忌羅は徐々に底の見えぬ紅夜に恐怖を抱き始めた

「……………知ってるか？」

「……………なにをじゃ」

「攻撃する勇氣は最善の殺戮者……………つてことを」

「!?!?」

紅夜は動いた足に魔力を込め地を蹴り一瞬で忌羅との距離を殺した  
嫌な予感が背筋を渡り反射的に忌羅は右に腕を重ねる

バツギイイ!!!!!!

槌で叩かれたような衝撃が腕を刺激しそれと同時に自分の視線が斜  
めに行くことが分かる。

「そしてそれは死をも殺戮する……………」

「!?!?!?!?!?」

地面に滑るように近くにある木を薙ぎ倒しながらようやく止まる

「ぐっ……………（我がたった一撃で?）」

自分は妖怪の中で最上位に君臨する種族鬼だ。

更に自分はその中で四天王に一番近いとも言われる程の実力者だ勿  
論、自分に自信はあるのに……………自分は強い筈なのに

「寝転んでいる暇か?」

「!？」

直ぐにその場から離れる

そしてその瞬間、踏みつけが落とされ巨大なクレーターが出来る

もう少し遅かったら………そんな思いが更に恐怖を生み出す

「（我は……我は……妖怪じゃ！鬼じゃ！）」

恐怖に震えた体を震え立たせる

妖怪は人間の恐怖により生まれた物

更にその中で最も恐れる鬼の存在

もう、この戦いは遊びでは無い生死を掛けた争奪戦

「行くぞ！」

能力を使い今の自分に出せる最大の身体能力で突進する

「っ、……………」

紅夜は直ぐに横に飛び突進を躲す

流石にあの突進を食らえば一溜まりもない

「喰らえ！」

「！」

忌羅は突然口を開くその瞬間、妖力を圧縮させた強力な魔砲が撃たれる

紅夜はあの突進を躲す為空中に浮かんでいるので直ぐに方向転換が出来ない

だが……

「嘗めるなよ？」

——武装召喚、血終冥闇死

その瞬間、忌羅の能力により増加された妖力の塊は半分に斬られた

紅夜の手には黒い鎖に縛られた鞘と血の色をした赤黒い刃の刀だった

「これで終わりじゃ！」

「っ！！！」

だがそんなことを忌羅は予想していた認めたくないがこいつ（紅夜）は自分より各上の実力者  
なら何が一番有効かそれは裏をかいた強襲

能力で今の自分に出せる限界まで増加させた身体能力で一気に紅夜との距離を詰め全力全開の拳を紅夜に降り下ろした

ドンッ！！！！

「……………」



「なっ、なに？」

だがその拳は紅夜の片手で防がれた  
紅夜の能力『無限を行使する程度の能力』無限即ち全てそれはあり  
とあらゆる能力を使えることでもあり紅夜は忌羅と同じ能力を使い  
同じくらいの力を出し片手で止めた

「まあ、楽しかったぞ」

タンツと地面を蹴り忌羅の無防備だった顎に思いっきり蹴りを入れた  
脳震盪を起こし忌羅の思考は一番止まり思考が戻ったその時

「……………」

刀を鞘に収め抜刀の構えをする紅夜の姿

「かみづち神雷斬

それをみた忌羅はああ……………負けたなと思いつくり目を閉じた

「……………武御雷たけみかづち！……！」

紅夜が刀を抜いたその時、天地を震撼させる程の雷霆が一閃となり  
鳴り響いた……

## 決着そして勝利（後書き）

燐

「やり過ぎに清き一票！」

紅夜

「お前が考えたんだろお前が」

燐

「因みに紅夜の能力はめ〇かボックスの理不尽な重税と完成を足して二で割った感じですよ！……多分」

紅夜

「なんか微妙……」

燐

「確かに下手したら二つの能力を劣化させて足して二で割った感じの方がいいかも」

紅夜

「まあ、それなりにチートだからいいか？」

燐

「正直使わなくてもチートなんだけどね紅夜他にも能力ばい能力があるし」

紅夜

「ネタバレだぞ作者」

燐

「そっつ？まっ、いつかとりあえず次回お楽しみに」

## 暗黙の憂鬱（前書き）

燐

「自分の人生すら決めてしまう最大の難敵、期末テストが今日から発表……なので更新は多分無いです。……多分」

## 暗黙の憂鬱

キヤ、キヤ、キヤ

ブルルル……

蒼天の青空の下、時刻は3時ころ子供は公園ではしゃぎその近くには我が子を見守る親の姿

視線をそらせば様々な色をした車が忙しくエンジンを唸らせ次々と通り過ぎていく

「（……平和だ）」

そう戦争や災害・いさかい・心配ごとなどが無い優しい光に満ちた風景が紅夜の目の前にあった

「（はあ……）」

公園のベンチに座っている紅夜は内心溜め息をついた

何故ならそれは紅夜にとって余りにも美しすぎる光景なのだから

曾て自分も触れたこの優しい光……だがそれは同じ光を作ることが出来る人間により深淵の絶望に紅夜は堕ちた

復讐……文字では五文字、漢字に直せばたった二文字そんな紙のよ  
うな言葉に紅夜は手を紅色に染めた

……そんなバカで愚かな自分を助けてくれたのが空だった

復讐を復讐する為に使った力を破壊され空っぽになってしまった紅  
夜に空は様々なことを教えた

何年付き合ってくれたかは覚えてなくてもそれは紅夜にとって苦し  
くも温かい時間

世界と向き合い自分と向き合った自分との戦い

新たな誓いを立てた知らない誰かの為に手を差し伸ばせるように……  
それはとても難しいことだった空から反発を受けた言い返しかった  
が空の一言に紅夜は黙るしかなかった

『綺麗な花を咲かせるためには雑草を抜くしかないんだよ』

紅夜の全ての考えを空は否定しなかったただ己の力を震い人を助け  
たとしてそれが正しいのか助けるに値する人だったのか

守るべき者と守らぬべき者を決めるその基準に紅夜を悩んでいた

少なからず今まで紅夜は自分の意思で人を守り時に人を傷つけた

「（そんな俺が……こんな所にいいんだろつか）」

あの忌羅と言った妖怪は紅夜の手によりその生命を断たれた

——もしこいつが人に害を及ばず妖怪なら？

その一片の思考が降り下ろす峰打ちする筈だった刀を凶器へと変えてしまった

「（なんて戯言なんだろう。俺はただの……）」

殺戮者、そしてそれを意味させることはただ殺したかったため（……）

「俺にはもう闇しか要らないか……いや、それ意外に似合わないか」

深く考え過ぎたのか空は橙色に染まりワイワイ遊んでいた子供達は親と手を繋げながら自分の家へと足を運んでいた

「……………ちっ」

嫌な予感がした

罪遺物と呼ばれる彼は身体能力が普通ではない

紅夜の目は確かに捉えた車に乗り居眠り（……）をする男性の姿が

「はぁ……………」

溜め息をついた瞬間、車は行動不能になり手を繋げた親子の方向へ

……

ドゴオオオオン!!!

甲高い音をしながら車は公園の外堀であったレンガに直撃した

「ギリギリセーフ……っ」と

直撃コースに居た筈の親子は何故かその場から一メートル離れた場所に移動していた

理由は簡単、紅夜は車が直撃する寸前に時を止めて（……………）親子を移動させたのだ

親子はほぼ目の前に起きた惨劇に固まっていた

「……………っ」

紅夜は体に異常を感じると路地裏に移動した

「ゴホ、ゴホゴホ」

小さく押し込ませるような咳をする抑えた手には赤色の液体が点々と付着していた

「ふう………参ったな」

壁に背中を預けゆっくり腰を地に着ける。



紅夜は自分自身の能力『無限を行使する程度の能力』を完全に使う  
ができない  
なので時を止めたり世界そのものに干渉するレベルを使えば反動に  
より体を痛める

「ま……三人の命が助かったんだ。これぐらいどうってことないか」  
因みに車に乗っていた人も固定魔法を使い無傷だ  
体に鞭を打ち無理矢理起き上がるが

トスッ

何かが刺さるような音がした

「……………厄日だ」

背中を見ると一本の矢が突き刺さっており麻酔薬と睡眠薬を塗られ  
ているのか体が言うことを聞かなくなり強い睡魔に襲われ紅夜は地  
に倒れた

「（くっ…………ちくしょう…………）」

内心愚痴りながら此方に歩いてくる誰かを見ようと瞳を動かす

そこには自分と同じ銀髪をした少女が居た

それを最後に紅夜は意識を失った

暗黙の憂鬱（後書き）

燐

「紅夜は強いよ」

紅夜

「……………そうか」

燐

「メンタル面は最悪だけど」

紅夜

「悪かったな」

燐

「あっさり、殺られちゃったね」

紅夜

「大丈夫だ。心臓取られようが頭潰されようが俺は生きれる」

燐

「さらっと、酷いセリフがよく言えるね」

紅夜

「それより空が心配だ。イクスさん達がいるから大丈夫だと思うけど仕事をよくサボるだからな」

燐

「大丈夫でしょ。あの空だし」

紅夜

「だから心配なんだ。最終的に起こられるの全部俺なんだぜ？」

燐

「そこはほら……良くに言っ」

紅夜

「？」

燐

「報われない人だ」

紅夜

「認められるかあああ！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1640u/>

---

東方零崎録

2011年10月6日17時31分発行